

# 第13章 失業等給付について

失業等給付は、労働者が失業した場合及び雇用の継続が困難となる事由が生じた場合に、必要な給付を行うとともに、その生活及び雇用の安定を図るための給付です。

失業等給付は大別して、求職者給付、就職促進給付、教育訓練給付、雇用継続給付の4種類に分けられます。

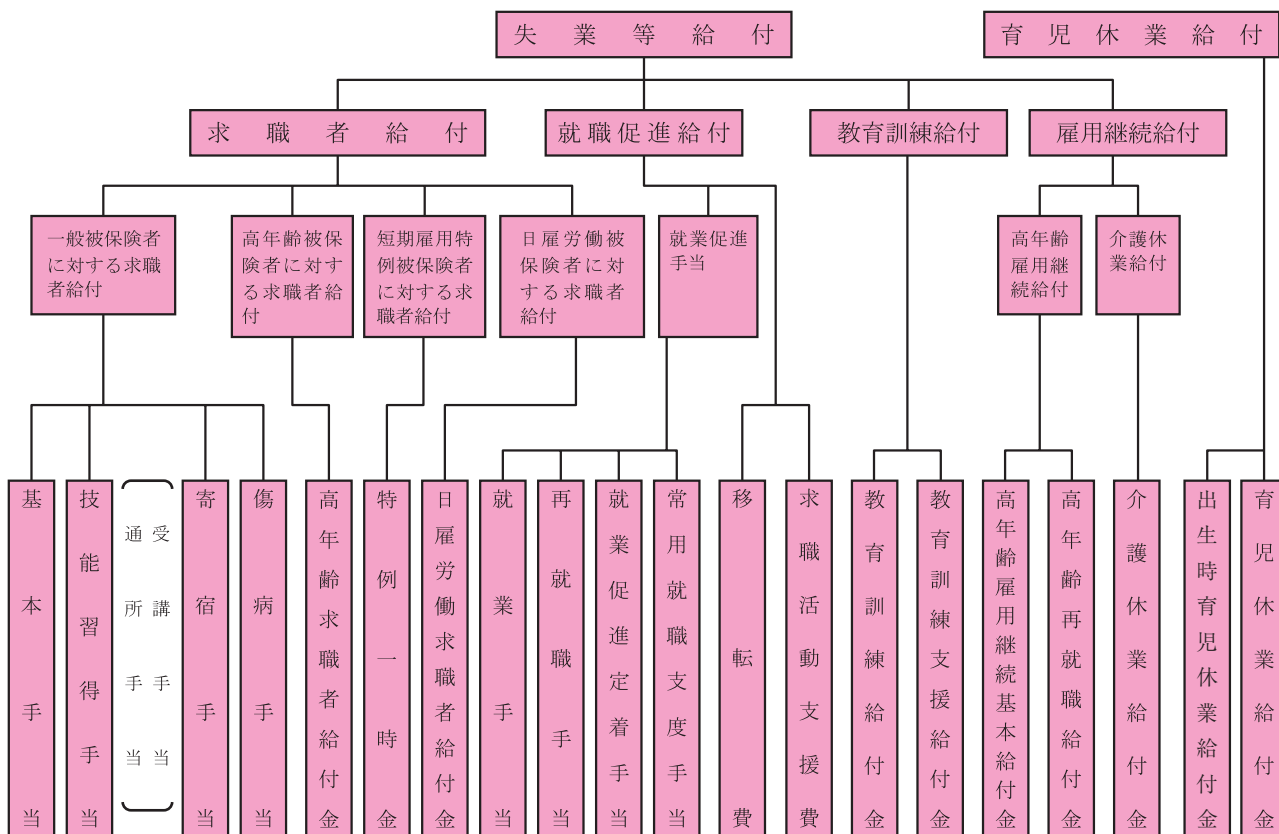
求職者給付は、被保険者が離職し、失業状態にある場合に、失業者の生活の安定を図るとともに、求職活動を容易にすることを目的として支給する、いわゆる失業補償機能をもった給付です。

就職促進給付は、失業者が再就職するのを援助、促進することを主目的とする給付です。

教育訓練給付は、働く人の主体的な能力開発の取組みを支援し、雇用の安定と再就職の促進を目的とする給付です。

雇用継続給付は、働く人の職業生活の円滑な継続を援助、促進することを目的とする給付です。

以上を分類し、図示すると次のとおりです。



## 1 求職者給付

### (1) 一般求職者給付

#### 【基本手当】

##### イ 受給資格及び被保険者期間

基本手当は、一般被保険者が離職し、労働の意思及び能力を有するにもかかわらず職業に就くことができない状態にある場合で、離職の日以前2年間に、被保険者期間が通算して12か月以上（特定受給資格者又は特定理由離職者（P188～189参照）については、離職の日以前1年間に、被保険者期間が通算して6か月以上ある場合でも可。）あったときに給付を受けることが可能です。

##### 被保険者期間とは……

雇用保険に加入していた期間のうち、離職日から遡った1か月ごとに区切っていった期間に賃金支払いの基礎となった日数が11日以上ある月を1か月と計算します。なお、賃金支払基礎日数が11日以上のある月が12か月ない場合は、完全月で賃金の支払いの基礎となった時間数が80時間以上の月を1か月として計算します。

（下線部については、令和2年8月1日以降に離職した者に限り適用となります。）

##### ロ 受給期間

**受給期間は、原則として離職の日の翌日から起算して1年間**です。（その間に、後に述べる所定給付日数分を限度として基本手当が支給されます。）

ただし、以下の事情で今すぐ職業に就くことができない方は受給期間の延長が認められます。

なお、高年齢雇用継続給付や教育訓練給付の支給対象となる場合は、同時に適用対象期間延長の申請をしていただくこととなります。

(イ) 妊娠、出産、育児、疾病、負傷、子の看護及び一定のボランティア等の理由により引き続き30日以上職業に就くことができない日がある場合には、その日数を受給期間に加えることができます。ただし、受給期間に加えることのできる日数は**最大3年間**です。

→ 受給期間延長の手続は、離職後において、**その状態が30日を経過した日の翌日以降、早期に行っていただくことが原則**ですが、延長後の受給期間の最後の日までの間であれば、申請可能です。受給期間延長申請書に離職票-2を添え、本人の住居所を管轄するハローワークに申請することになります。

また、本人がハローワークに出頭できないときは、代理人又は郵送でも手続ができます。代理人の方が手続する場合には、委任状が必要ですのでご注意ください。

(ロ) 定年退職者等で、一定期間求職の申込みをしないことを希望する場合には、その日数を受給期間に加えることができます。ただし、受給期間に加えることのできる日数は**最大1年間**です。

→ 受給期間延長の手続は、**離職日の翌日から起算して2か月以内**に、受給期間延長申請書に離職票を添え、本人の住居所を管轄するハローワークへ、本人自身が申し出てください。

(ハ) 離職後、事業を開始等した方については、当該事業を行っている期間等の日数を受給期間に加える特例を利用できる場合があります。ただし、受給期間に加えることのできる日数は**最大で3年間**です。

→ 受給期間特例の手続は、原則として**事業を開始等した日の翌日から2か月以内に**、受給期間延長等申請書に離職票-2及び事業を開始等した事実と開始日を確認できる書類を添え、本人の住居所を管轄するハローワークに申請することになります。また、本人がハローワークに出頭できないときは、代理人又は郵送でも手続ができます。代理人の方が手続する場合には、委任状が必要ですのでご注意ください。

## 八 給付率及び日額

基本手当の日額は、原則として離職前6か月の賃金を平均した1日分の45%～80%を乗じて得られる額であり、以下の表のとおり下限額と、年齢区分により上限額が定められています。

《下限額》(令和5年8月1日現在)

賃金日額	基本手当日額
2,746円	2,196円

《上限額》(令和5年8月1日現在)

年齢区分	賃金日額	基本手当日額
～30歳未満	13,890円	6,945円
30歳以上～45歳未満	15,430円	7,715円
45歳以上～60歳未満	16,980円	8,490円
60歳以上～65歳未満	16,210円	7,294円

●表の金額は毎年見直しが行われますので、必要な時点でハローワークにご確認ください。

## 二 所定給付日数

受給資格がある方で、被保険者であった期間及び離職理由等により以下の表のとおりとなっています。

① 一般の受給資格者(定年・自己都合等)

	10年未満	10年以上 20年未満	20年以上
65歳未満	90日	120日	150日

② 障害者等の就職困難者

	1年未満	1年以上
45歳未満	150日	300日
45歳以上65歳未満	150日	360日

③ 特定受給資格者(倒産・解雇等により再就職の準備をする時間的余裕がなく離職を余儀なくされた方) P188参照。

一部の特定理由離職者(※)(期間の定めのある労働契約が更新されなかったこと等により離職された方) P189の1参照。

※ 特定理由離職者(P189の1参照)は離職日が令和7年3月31日までの方が対象となります。

年齢	被保険者であった期間				
	1年未満	1年以上 5年未満	5年以上 10年未満	10年以上 20年未満	20年以上
30歳未満	90日	90日	120日	180日	—
30歳以上35歳未満		120日	180日	210日	240日
35歳以上45歳未満		150日	180日	240日	270日
45歳以上60歳未満		180日	240日	270日	330日
60歳以上65歳未満		150日	180日	210日	240日

### **【技能習得手当】**

受給資格者が、ハローワーク（公共職業安定所長）の受講指示により公共職業訓練等を受講している間は、基本手当のほかに技能習得手当（受講手当・通所手当）及び寄宿手当を受給することができます。

### **【傷病手当】**

受給資格者が、離職後ハローワークに出頭し、求職の申込みをした後において、傷病のため15日以上引き続いて職業に就くことができない状態となった場合、基本手当の日額に相当する額の傷病手当が、所定給付日数の範囲内で支給されます。

◎ 特定受給資格者（倒産・解雇等により、再就職の準備をする時間的余裕がなく離職を余儀なくされた者）とは、具体的には、下記の類型に該当する方をいいます。

### 1 「倒産」等により離職した者

- ① 倒産（破産、民事再生、会社更生等の各倒産手続の申立て又は手形取引の停止等）に伴い離職した者
- ② 事業所において大量雇用変動の場合（1か月に30人以上の離職を予定）の届出がされたため離職した者及び当該事業主に雇用される被保険者の3分の1を超える者が離職したため離職した者
- ③ 事業所の廃止（事業活動停止後再開の見込みのない場合を含む。）に伴い離職した者
- ④ 事業所の移転により、通勤することが困難となったため離職した者

### 2 「解雇」等により離職した者

- ① 解雇（自己の責めに帰すべき重大な理由による解雇を除く。）により離職した者
- ② 労働契約の締結に際し明示された労働条件が事実と著しく相違したことにより離職した者
- ③ 賃金（退職手当を除く。）の額の3分の1を超える額が支払期日までに支払われなかったことにより離職した者
- ④ 賃金が、当該労働者に支払われていた賃金に比べて85%未満に低下した（又は低下することとなった）ため離職した者（当該労働者が低下の事実について予見し得なかった場合に限る。）
- ⑤ 離職の日の属する月の前6か月間の内、1月で100時間以上、3月連続して45時間超又は2～6月平均で月80時間を超える時間外労働及び休日労働が行われたため、又は事業主が危険若しくは健康障害の生ずるおそれがある旨を行政機関から指摘されたにもかかわらず、事業所において当該危険若しくは健康障害を防止するために必要な措置を講じなかったため離職した者
- ⑥ 事業主から妊娠・出産を理由とする不利益な取り扱いを受けたこと、また育児休業・介護休業等の申出を拒否されたことにより離職した者
- ⑦ 事業主が労働者の職種転換等に際して、当該労働者の職業生活の継続のために必要な配慮を行っていないため離職した者
- ⑧ 期間の定めのある労働契約の更新により3年以上引き続き雇用されるに至った場合において当該労働契約が更新されないこととなったことにより離職した者
- ⑨ 定年後の継続雇用を希望していたにも関わらず、就業規則に定める解雇事由又は退職事由（年齢にかかるとものを除く。）に該当したため、60歳以上65歳未満の定年により離職した者
- ⑩ 契約更新上限がある有期労働契約者が3年以上引き続き雇用され上限到来により離職する場合であって、以下いずれかに該当する場合（※）
  - i) 採用当初はなかった契約上限がその後追加された又は不更新条項が追加された場合
  - ii) 採用当初の契約更新上限がその後引き下げられた場合
  - iii) 平成24年8月10日以降に締結された4年6ヶ月以上5年以下の契約上限が到来した場合（基準日である平成24年8月10日（改正労働契約法公布日）前から、同一事業所の有期雇用労働者に対して、一様に4年6ヶ月以上5年以下の契約更新上限が設定されていた場合を除く）（※）平成30年2月5日～令和7年3月31日までの離職者に限る。
- ⑪ 期間の定めのある労働契約の締結に際し当該労働契約が更新されることが明示された場合において当該労働契約が更新されないこととなったことにより離職した者（上記⑩に該当する者を除く。）
- ⑫ 上司、同僚等から故意の排斥又は著しい冷遇若しくは嫌がらせを受けたことにより離職した者及び事業主から職場におけるセクシュアルハラスメントの事実を把握していながら、雇用管理上の措置を講じなかった場合
- ⑬ 事業主から直接若しくは間接に退職するよう勧奨を受けたことにより離職した者（従来から恒常的に設けられている「早期退職優遇制度」等に応募して離職した場合は、これに該当しない。）
- ⑭ 事業所において使用者の責めに帰すべき事由により行われた休業が引き続き3か月以上となったことにより離職した者
- ⑮ 事業所の業務が法令に違反したため離職した者

◎ 特定理由離職者とは、具体的には、下記の類型に該当する方をいいます。

- 1 ① 期間の定めのある労働契約の期間が満了し、かつ、当該労働契約の更新がないことにより離職した者（その者が当該更新を希望したにもかかわらず、当該更新についての合意が成立するに至らなかった場合に限る。）（188ページ「特定受給資格者」の2の⑧⑩及び⑪に該当する場合を除く。）（※）  
（※）労働契約において、契約更新条項が「契約を更新する場合がある」とされている場合など、契約の更新について明示はあるが契約更新の確約までではない場合がこの基準に該当します。
- ② 188ページ「特定受給資格者」の2の⑩に該当する者のうち契約期間3年未満又は契約期間が3年以上ではあるが1回以上契約更新がされていない場合（※）  
（※）平成30年2月5日～令和7年3月31日までの離職者に限る。
- 2 以下の正当な理由のある自己都合により離職した者
  - ① 体力の不足、心身の障害、疾病、負傷、視力の減退、聴力の減退、触覚の減退等により離職した者
  - ② 妊娠、出産、育児等により離職し、雇用保険法第20条第1項の受給期間延長措置を受けた者
  - ③ 父若しくは母の死亡、疾病、負傷等のため、父若しくは母を扶養するために離職を余儀なくされた場合又は常時本人の看護を必要とする親族の疾病、負傷等のために離職を余儀なくされた場合のように、家庭の事情が急変したことにより離職した者
  - ④ 配偶者又は扶養すべき親族と別居生活を続けることが困難となったことにより離職した者
  - ⑤ 次の理由により、通勤不可能又は困難となったことにより離職した者
    - i) 結婚に伴う住所の変更
    - ii) 育児に伴う保育所その他これに準ずる施設の利用又は親族等への保育の依頼
    - iii) 事業所の通勤困難な地への移転
    - iv) 自己の意思に反しての住所又は居所の移転を余儀なくされたこと
    - v) 鉄道、軌道、バスその他運輸機関の廃止又は運行時間の変更等
    - vi) 事業主の命による転勤又は出向に伴う別居の回避
    - vii) 配偶者の事業主の命による転勤若しくは出向又は配偶者の再就職に伴う別居の回避
  - ⑥ その他、188ページ「特定受給資格者」の2の⑬に該当しない企業整備による人員整理等で希望退職者の募集に応じて離職した者等

※ 詳しくは本人の住居所を管轄するハローワークにお問い合わせください。

## (2) 高年齢求職者給付（一時金）

この一時金は、高年齢被保険者が離職し、労働の意思及び能力を有するにもかかわらず職業に就くことのできない状態にある場合で、離職の日以前1年間のうちに被保険者期間が6か月（**なお、賃金支払基礎日数が11日以上**の月が6か月ない場合は、完全月で賃金の支払の基礎となった時間数が80時間以上の月を1か月として算定します。（下線部については、令和2年8月1日以降に離職した者に限り適用となります。））以上ある場合に、基本手当に代えて、高年齢求職者給付金として一時金が支給されます。

令和4年1月1日より新設された雇用保険マルチジョブホルダー制度により被保険者となったマルチ高年齢被保険者が離職した場合も、本給付の対象となります。

被保険者であった期間	1年未満	1年以上
高年齢求職者給付金の額	30日分	50日分

## (3) 短期雇用特例被保険者の求職者給付（特例一時金）

特例一時金は、短期雇用特例被保険者が離職し、労働の意思及び能力を有するにもかかわらず職業に就くことができない状態にある場合で、離職の日以前1年間に被保険者期間6か月（当分の間、1暦月において賃金支払いの基礎となった日が11日以上あるものを1か月として計算（**なお、賃金支払基礎日数が11日以上**の月が6か月ない場合は、完全月で賃金の支払の基礎となった時間数が80時間以上の月を1か月として算定します。（下線部については、令和2年8月1日以降に離職した者に限り適用となります。）））以上ある場合に、基本手当の30日分（当分の間、40日分）に相当する額が支給されます。



## (4) 日雇労働求職者給付金

### イ 受給要件

日雇労働求職者給付金は、失業の日の属する月前2か月間に26枚以上の印紙が貼付され、日雇労働被保険者が失業した場合に、ハローワークに出頭して求職申込みをしたうえ、その失業している日について認定を受け、失業の認定が行われた日数分が支給されることとなっています。

ただし、日雇労働被保険者が各週について就労しなかった最初の1日分は支給されません。

### ロ 日額

前2か月間に26枚以上の印紙が貼付されているときに、級別貼付状況に応じて、次のとおり決定されます。

【第1級 7,500円】

【第2級 6,200円】

【第3級 4,100円】

印紙の貼付枚数	給付日数
26枚～31枚まで	13日
32枚～35枚まで	14日
36枚～39枚まで	15日
40枚～43枚まで	16日
44枚以上	17日

### ハ 給付日数

前2か月間に貼付された印紙の枚数（給付日数の決定に等級は関係ありません。）によって、右表のとおり計算されます。

## 2 就職促進給付

### (1) 就業手当

受給資格者が、所定給付日数の3分の1以上かつ45日以上を残して、再就職手当の支給の対象とならない職業（短時間の就労など）に就いた場合において、その職業に就いている日について、一定の要件に基づき、基本手当日額の30%に相当する額（ただし、上限あり）が支給されます。

### (2) 再就職手当

受給資格者が、所定給付日数の3分の1以上を残して、安定した職業（1年を超えて引き続き雇用されることが確実と認められること。）に就いた場合に、一定の要件に基づき、**基本手当日額（ただし、上限あり）×所定給付日数の支給残日数×60%または70%**（支給残日数が所定給付日数の3分の2以上の場合は「支給残日数の70%」、所定給付日数の3分の1以上3分の2未満の場合は「支給残日数の60%」）が、一時金として支給されます。

### (3) 就業促進定着手当

早期に再就職をして再就職手当の支給を受けた人が、引き続きその再就職先に6か月以上雇用され、かつ再就職先で6か月の間に支払われた賃金が雇用保険の給付を受ける直前の賃金に比べて低下している場合に、**（離職前の賃金日額－再就職の日から6か月間に支払われた賃金額の1日分の額）×再就職の日から6か月間内における賃金の支払いの基礎となった日数（ただし上限あり）**が支給されます。

### (4) 常用就職支度手当

障害のある方、45歳以上の方で労働施策総合推進法等に基づく再就職援助計画の対象者など、就職困難な受給資格者が、ハローワークまたは民間職業紹介事業者の紹介により、安定した職業に就いた場合に、一定の要件に基づき、基本手当日額（上限あり）×36日（支給残日数が90日未満の場合は、支給残日数もしくは45日のいずれが多い日数×40%）が支給されます。

### (5) 移転費

受給資格者等が、ハローワーク及び民間職業紹介事業者の紹介した職業につくため等の場合に、その住所または居所を変更する場合であって、安定所長が必要と認めたときに支給されます。

### (6) 求職活動支援費

求職活動支援費とは、広域求職活動費、短期訓練受講費、求職活動関係、役務利用費からなり、受給資格者の方が求職活動に伴い、安定所長が必要であると認めたときに支給されます。

※上記の手当には、申請書等に事業主の方に証明していただく欄があります。労働者の方から申請書の記入依頼を受けた場合には、速やかに対応していただきますようよろしくお願いいたします。

また就業促進定着手当につきましては、支給申請書に記載頂いた期間の分の出勤簿の写しと賃金台帳の写しについて、雇い入れた方への提供をお願いします。

これらの写しは就業促進定着手当の支給要件に該当するか否かの調査や、該当した場合の支給額の計算に必要となりますので、御協力をお願いいたします。

## 3 教育訓練給付

### (1) 教育訓練給付金

#### (i) 一般教育訓練受講に係る教育訓練給付金

一定の要件を満たす雇用保険の被保険者(※)(=在職者)、または被保険者であった方(=離職者)が、厚生労働大臣の指定する一般教育訓練を受講し、修了した場合に、教育訓練施設に支払った受講料等の一定の割合に相当する額が支給されます。

\*被保険者とは、一般被保険者及び高年齢被保険者をいいます。以下この項目において同じです。

##### 【支給額】

教育訓練経費(※)の20%(上限10万円)

ただし、支給額が4千円を超えない場合は支給されません。

※ 教育訓練経費とは…申請者自らが指定教育訓練実施者に対して支払った入学金及び受講料(最大1年分)の合計額を指します。受講開始日前1年以内にキャリアコンサルタントが行うキャリアコンサルティングを受けた場合は、その費用を教育訓練経費に加えることができます(ただし、その額が2万円を超える場合、教育訓練経費により支給できる額は2万円までとなります)。事業主等が申請者に対して教育訓練の受講に伴う手当等を支給する場合は、原則的に教育訓練経費から差し引いて申請することとなります。

#### (ii) 特定一般教育訓練受講に係る教育訓練給付金

一定の要件を満たす雇用保険の被保険者(=在職者)、または被保険者であった方(=離職者)が、厚生労働大臣の指定する特定一般教育訓練を受講し、修了した場合に、教育訓練施設に支払った受講料等の一定の割合に相当する額が支給されます。

##### 【支給額】

教育訓練経費(※)の40%(上限20万円)

ただし、支給額が4千円を超えない場合は支給されません。

##### 【特定一般教育訓練受講承認の証明】

特定一般教育訓練受講に係る教育訓練給付の支給を希望する方は、原則として、訓練受講開始日1か月前までに、受給資格確認の手続を行う必要があり、この受給資格確認の手続の前に厚生労働大臣が定めるキャリアコンサルタントによるキャリアコンサルティングを受け、当該キャリアコンサルティングを踏まえて記載されたジョブ・カードを提出する必要があります。

#### (iii) 専門実践教育訓練受講に係る教育訓練給付金

一定の要件を満たす雇用保険の被保険者(=在職者)、または被保険者であった方(=離職者)が、厚生労働大臣の指定する専門実践教育訓練を受講している場合に、教育訓練施設に支払った受講料等の一定の割合に相当する額が支給されます。

##### 【支給額】

教育訓練経費の50%(1年間の支給上限額40万円、総支給上限額120万円)※。

訓練受講修了した方で、あらかじめ定められた資格を取得等し、受講修了日の翌日から起算して1年以内に雇用保険の一般被保険者として雇用された場合は、支給額は教育訓練経費の70%(1年間の支給上限額56万円、総支給上限額168万円)※となります。(実際の支給は、それまで50%計算で支払われた給付金との調整を行うため、教育訓練経費の20%相当額が支払われることになります。)

ただし、支給額が4千円を超えない場合は支給されません。

※ 平成31年4月1日から業務独占資格・名称独占資格の取得を訓練目標とする養成施設の課程及び専門職大学・専門職学科の4年課程を受講される方は、教育訓練給付金の支給上限額について、通常3年分に加えて、4年目受講相当分(1年間の支給上限額56万円、総支給上限額224万円)が上乘せされる事があります。

##### 【専門実践教育訓練受講承認の証明】

専門実践教育訓練受講に係る教育訓練給付の支給を希望する方は、原則として、訓練受講開始日1か月前までに、受給資格確認の手続を行う必要があり、この受給資格確認の手続の前に厚生労働大臣が定めるキャリアコンサルタントによるキャリアコンサルティングを受け、当該キャリアコンサルティングを踏まえて記載されたジョブ・カードを提出する必要があります。

### (2) 教育訓練支援給付金

一定の要件を満たす専門実践教育訓練受講に係る教育訓練給付金の支給を受けている方(受講開始時に45歳未満である方)が、当該専門実践教育訓練(通信制・夜間制等の一部の訓練を除く)を受けている日のうち失業している日について支給されます。

##### 【支給額】

原則として、基本手当の日額と同様に計算して得た額に80%を乗じて得た額に支給日数を乗じて得た額が支給されます。